一捻香

へ 5
2223

門號 へ 13 5
2223
巻

明治四十五年四月廿四日
藤野漸 氏寄贈

早稲田大学図書

序

古人云あり栴檀をふたはより
こ皆香しとかくらんされは一節の
香譜に云ふも母のあまねく世にひろめてし 静本
源梓に云ふ 只管 露香居士の著す
一年余をも編み一稿を書し以
すてに居士この風雅を世にひろめ人
この句をもへ張りさらにさらし ぬへき事を

藤野漸氏遺愛之記

華は栖のいに陰をはらひもてあそふ
のみ形ち似たるはまた家業をつかさとし
すへき深き情を知らさる輩まて
この哥を翫ひし松竹をきく人の上
聞きしより蔦錦の紫式部の兼之父の
家名を翫ひ伝もしまき紅
人や源氏の物語をおほえて花
葉を専として古人の跡を見まとらし

前にして源氏の父母をよみ継てはきて扨
とりわけ家名をうつ重して専ら育慈
古義の業とする人々を離て蜻蛉の日記を繙き
家の道に譲るに明義をとりて源
私情を交へる人の知るべき事かは暁象
にして其を見る事の業にて家督を官に
すゝめる事は思ひ深くきはめて
山寺にて法語の文にて敬者

をえとさまに此部をまちまちに名四方に
雲居ひ蓋護峨の下のゝ翁象々福を
らきしそ従子に言ふのと以下糸し
老後のみなといひて遠まるあふるまさと
下一層の精舎を蓋るに枕橋の
あるゝ小家墨を結構して庵下に
遊ぶの便りとなし燈友をと愛す
含ある哉古人の様々様の法を

志をむ西東に訪ひ尋ねて文を案
境に錯をあらそひ人をして能
しめ生涯の風月のたよりとなさ
しめきとし其の草葉の中にむすばれ
能因枇杷の後三代の
たより衛栴檀の比とはいとく
香しといえ共此事を賞記
しる一揚香の名を記しし

書す乃趣

明治十六年十一月

梅[illegible]書

追善之俳諧

出てゆくて虫をおつめて秋の月　完鷗居士

露のかゝりし只さき袖　涼坪

咲のこる大谷の下葉流けて　鶯笠

杖の橋かけん善根小袖かり　百尺

冬のきわまや押よつる町の筋　黙平

雪も近よ数小山行以石　玉砂

ウ

籠男ふ荷ふ水奈波なれて　精知
人のこゝろのよめぬ何なり　汎翠
寒ひのあとある静ふ縫やの人　宇山
気りぬる寺ふも仕掛まきる波　柏菜文　起室
小の者まてあ二艘に集まれ寸　富水
田毎にうつる数は螢　花朝
月よけふ流るる無する力石　幹雄
旅守宿の業内も年―　暁香

麦喰ふ友ふ宿恵を報み合ひ　青宜
赤とし降て晴るれ白　永年
流しと家来も花の咲き声し　等栽
信あとけハ消ゆる塩　採花
走り行先きもこえぬ嵐宿　梅年
川ちもとまけふ付る泥足　竹文
雨ふり苦気ハ宿たかるくと　菜雄
法こゝきうせぬ流の疎なり　千尉

咲ちらすたゞ松風の吹まゝに　太年

羽子の行も敗をさそひから　松雄

おのれからの世帯あそぶ廓言葉　呉仙

備いちまきありしむかしめく　康富

物いはで寝ぐら離れ去失にて　月彦

御文庫写ふ点を考ふ内　芳泉

能有小難印のけの切月採　永採

窓に炭て拵白き藤　謝徳

例の外雲ふまかせし日の盆の布　尋香

新家から文新家からゝ　大喬

細説を返していやまし山に張　素水

楽ひ居て毎継蔵の以る　成雄

盤の香のこもれて古き硯箱　春湖

除ものゝうへつむき新　枇草

二不軒何宗の三週忌追福に

打敷のみしも衣いまや明の白む　春湖

清て読しことの人の塚の露時雨　鶯笠

芭蕉葉にうつれやうつてひかる星　和恭

葛飾の根にかゝるゝや月の影　松雄

吹くる月や其秋ゝの草紅葉　千尚

見ゆる夜や二十七日の雨の月　永探

こゝろせよまじはりの友よ秋の暮　菊舎

妙なる出し言出し秋も寒ころせ　蓮宇

まからぬ月の梢や秋は此屋庵　精知

出来秋の中そ足の餅の音　超室

稲津にならぬ新たなころせぬ　珂水

秋は目妙なる出来る見たるかな　逸外

たゞ何となくて露の枝ならん　採芝

秋もはや二ヶ世かゝる法の影　照平

夢なきやみとりも世にも月は友　壽哉

手向まし雲の峰

萩数々忘れし海の茶碗かな　錦芽

傘かさし落まじらぬ一葉哉　堤雨

水掛て手向草も秋の風　偉泉

けさ見て涼しき露の光かな　洪園

秋ことさ枯野の露を惜みてき　若隣

忘れ得ぬ事　地に波を打ちそれ　尚有

閼伽汲や　袖も露けき露時雨　青石

露ながら涼しき花の野の声　孤高

地にさへ夜もや更けの中をより　守墨

長き夜や　火消て寝るさへ　市橋

灯明や　夕暮の秋の声　濤聲

灯しくや月に澄ても秋の声　汎翠

修験の帰りも長き紀の国かな　孫　塘宇

笹むらに秋風吹く門の屋　玉砂

日暮秋ならしきりて松風に音すかな　百尺

父定齋居士の為に大祥忌とて
法莚を開き記蛾を集へ
香華紙供養して飲茶鼓
思ひ比まれを帽く愛たえ以
ゆる霊前に既に悲まみらせんとて
白菊もしをき忘れぬ忌日哉　源坪

ゆかりとてかゝもまちたる秋の宿　古人　為山
白魚や印の墓へ露しく案　〃　士前
山風にもせず秋音や耳とゝき沈　〃　梅裡
来ても何とも晴れ如菊の香やちる　〃　嵐牛
はかなしや清き教ゆかし座に謝る暑れ　〃　默池
さゝえ立や継衣の袖裳とし　の色　〃　素屋

ひそか只何とからん来るや初時雨　古人 蒼山
艶くし額若やはよる布鶉　、棗公
梅もやし柏茸の匂ふる日和　、三癸
宿菜や竹のあらしか見すもはし　、一鼎
立ち之人まうしの句な也松は風　、壽道
何雪て祝む海も一手や梶の花　、梶宣
松茸茶伸よし鳴や鰭の雛子　、巴大
三人の来しかる首てら乞柳　、樗風

何の御の強い出や菜の花　、小雲
鶯や音あの毛し古花　、来地
遠山の花さくうらん奈良晒布　、流霖
天の川不二の巣中流るゝ　、可轉
米搗のもと海や梅の夕月夜　、西美
おしまさて来るや濡の様拂　、其我
つゆしとらの桜さく前ら小路ける　、他山
中ならさやゝ一星ん白木槿　、月杵

風わたる下に濁りし鳴戸かな　古人 木和

出初に加茂川こえて衣かへ　、随宜

違ふ人も湖次郎なる麻地酒　、竹外

ふきさしてまた水なる散り葉　、石渡

柳も又涼しくなりし竹の堂　、月溪

龍王のかけりし次第自由　、文琳

寄せ波を振れ蜻蛉の秋の声　、竹笛

掘り立て蝉を練りし田畑の秋　、香芸

悲し茶のかをるに巻る秋の末　、五溪

晩に寄りし塩がまつや雲の声　、涼花

秋風の色むさを吹なる蝉の声　、禾暁

蜩や初霜入るむ中峠き　、甘海

人こはれもや鳴くつるかの日より　、花兄

ささ舟や藤箱なやさき川千水　、蔦之

営みや散りて来る初音の秋　、是三

川ぶ緑乃くずを流す夜気哉　、五休

東京

月花よき名や割木に腰かけて　尋香

一羽ハ二つの息かけてたつ鴫　成雅

蜘蛛にかゝるも行や鳴ちどり　康甫

雲もまた消る峯かな我やかくれ月　卜早

竹の子や流しつらしき船のうち　永年

名に出ても梅咲き初め此山の庵　幹雄

勤まるや千代始めの春や鏡餅　詢莞窩

さきハとて風花誘ふ桐一葉　大喬

水仙や色をめでゝ葉の姿かな　花紅女

都より萬雨の春や梅やまき　三千守

吉野にも花まちわびし秋の空　文禮

ふくらむとまつ程ちる実の尾花鴫　予雲

菜畑の白き花の絶て初時雨　青宜

青々と破りて芝ハ新時雨　宇山

蛍生る関に拝除書して夜半哉　菊雄

鳩啼ねその打て帰る堤の柳　竹丈

つ松やかゝりたく投下来ての桑　謝徳

まるもうし菖蒲ハ早し杜若　湖亭

さしかけて実のあや縞ね種遠ひ　芳清

白魚やし下石の暑に暑さ久しき　金羅

根に寄ける和ちね冷き清水哉　呉仙

基塚此ちり小てなくちて鵲　二洲

箸置て自ら笑ゝや一ちゝり　月亭

さ葉や縁葉毎似め影に法や　涼奈

ちや風ちもの小音て春若　露岳

咲とけむ花に追ふ秋の比　完岱

夕ぐれ野に出る人は水鶏哉　松鳩

茎雑にもって水ぬ温まを覚へ侍り　聴松

花残らとけて是松江中に　良大

ちから世の仁知るさし石の後　梅年

都にも月見る野あり萩すゝき　素水

水霜の何となりぬ露の影　晩香

山ひとつかくして咲や菊の花　桂花

霧晴よき影さへありぬ桐一葉　如泉

柳散し水にとゝらく動かせり　謝笠

見る事を老れハおしや破れ壺　愛石

兎に角にて見てゐる人よ菊の朶　芳泉

むら雨の降しさせたり菊の露　富水

嘘頃にまくり合せてけふの月　太年

落てからつま掃て花形哉　弘美

ふる春のまよて出にけり紅葉ぞ　蕉露

淋しさの雲の神らし夜の月　山月

下萌を麦にこゝろすや小春哉　玉成

まつ霜や餅にふえなき新庭　其流

手枕の行手住や縄たゝき　雨舟

奥好かく菊見る絶の四月ど　空狂

根岸の月影白し虫のこゑ　素石

何となく待こゝろして秋の暮　春沙

西京

夕露や飯焚やめて衣振　犂春

出むかへに出そめる鳴る柳かな　拾山

朝良や露にぬれて渡る咲　荷章

茶にまかれ酒に起されて春の月　柳後

さくらのしきものあれて逃る　百可

うき中の嫌へ出かけて初音かな　舜岱

様て何頼雲雀太きし初撰取　稲處

大坂

こゝこゝし雲も世きて鳴くなり　潮水

人の家も閉て眠る田植の頃　流美

白きむや若き人を舟の行　徐来

稲はや柳のかけ行据ゑる　文鳳

よき清水掬て人に羨ませけり　安人

藪入や白足袋きせて細うちも　南路

神戸

鳴山も暮ていとおし雉子の影　卓志

大和

秋立や鍋のふたすひ味来らん　水石

伊勢

枳殻らしや先船白帆に流るなし　果然

尾張

稲苗て涼しらしと妙も出なり　きし女

てらくと走る筆も河ふ千鳥哉　静處

家水を汲手に暑き鉄かく星かな　可洗

またきつ菊にちんまる浅茅の篠竹　羊山

汐細れは日和ころおのれのおのれ　素陽

薄篁かに露しと思ふ一間の邦　禾啓

咲ころに香れは行くし梅ちる変　鏡女

まくろ月や諫早ゆき往てはれなみ添へ　三楓

月白し霧より露にて明しらむ　祖康

旅行の秋をけふ別れし　杜菱

見へ出して柳より暮し山かつら　酔雨

三河

花ちるや寸風あらき声ふすゝれ行　半仙

菊好は菊をもさして茶会　石芝

葉迎し日かけ照て冬木立　李川

蝶も出て日和語へ行幸道　百嶺

遠江

九くさる月か三秋を今宵哉　鶴村

折よりは山ふみ寒して冬籠　十湖

降白露かる紫畑のそ狩　知碩

延る家のさまかへて松かさり　廿谷

鶯かさしへ宮ありて露のはう　平臺

まつ秋や驚かされし萩の風　蕙敬

啼かれて来て寄りかけ初鳥　守孝

湖ふく風ふ霧たゝる不二の空　洋々

よふ吹ふ浅茅も吹や芦の原　竹華

守菜や勢て霧時猿旅記　通義

一吹やもれぬ孫ぞ信相一葉　木潤

駿河

初霧や小網の浪のうゝひ　鶴堂

山菜見や上波まだ繕ちか哉　青溪

裂箸八ちらしたまや見送　すゝ紀

秋のこゝろ志し小逐く気山の雲　穂堂

ちらしと来てはなよき霧かな　秋圃

人の目やまめなまぬけも花蘇　桂女

芭蕉にして見かせ山そ落の紅ゝ　乙彦

炎て霜よせぬ書ゝやハ重樺　成叟

甲斐

落水や波も来ぬ人にて訪　竹良

夢あうち舞ふ竹とも霧哉　左岳

洞いろを忘れぬ池のしだれ松　寸松

枝一つもいよく霜て起てこぼつらん　水西

きすふれと雪識るいろや梅の花　半拙

ゆかりのふり紅くもらで菫ゆかり　桂圃

着たしふ名猶もいそげ更衣　白隣

とも晴れ青葉や月桂の白椿　菜洲

吉野のさくらのしき間をもれて次　草國

相撲者て残し勝者に移りの之　雷石

伊豆

ならむとて薪くはらぬ那郷山　連水

相模

探しきれ蒲萍去し夜の月　亀巣

落月や梅の香暮れ格子先　不染

燕のゝを涼きもし絶や天の川　雪蕉

武蔵

海山のもれこ耗よられうきら子　蕙水

初秋のもつるゝ小笹に雲の露　　其峰

昨日にかへて白き稲の花　　左助坊

黄昏の神音の色や雲の上　　雲外

さゝ霧や前なかしたる麦畑　　正份

見えてき根にしてかゝる時や雲の峰　　可尋

暮もあき花に来よ二日の秋　　素朴

静かや桃の下花ひきは和　　松青

燈籠の灯さへ牡丹の跡迄これ　　燕子

花つみて見る鶴吹る雲雀かな　　雪舟

秋の山のちりの色捨も紅葉や錦のかな　　聚雨

須磨都の夜や花さき深　　淡影

刈稲や大田の夕けしき　　半成

月澄て雲とみゆるや萩の花　　枕流

時に出る人はまた露の秋　　文賀

窮屈な紙子張ても雑煮哉　　正佳

月ならきかゝへ鳴けり子鳥哉　　為成

咲ひらく咲もふれたり雪の山　幻叟

供待の来てもなくさむ若菜かな　恭眠

子福者のこれも笑ひそけし哉　楓處

きのふけしたまこや庭の萩すゝき　酉山

たむけする花及ぬ世を初雪哉　上總　文種

枝折たよりに抄くきて見る櫻　下總　歸雲

吹よけて出る背中し初時雨　鶴苑

松林新宮野も霞んて雑煮かな　歩山

詠らしと雪の中より初のうくひす　季成

旅立しやまた雲の香きのして　和記

来しまゝ海物も草おし二十日　森鄉

摘出すや曙まつくと毎年の事　松英

置初しの香も廣て松七草菜　八雲

峠ちるに野ゝ出ゝるや小松摘く衣　梅理

海苔桒をまや恭こゝの花氣に　釣月

袖に哀梅ひらけり一日旅　秋月

行年や金屏たゝむ大廣間　静海

月を雲れのふさまや神の河　島風

嫁ぬつゝまつて日の今小春かな　紫雄

青葉のかゝく句出や秋日和　清甫

採ゝやよき水は鯖魚も一日つゝ　拙渓

目の新たくなし每に新なり　竹甫

笑来ら逃あて秋の日差しかな　有隣

まつ鴫やまや人足も場拿叱く　芳谷

昨夕秋に出ても狩しられ坂の行方　霞丘

雨ゝしとことゝ氣の先の時雨かな　旭齋

美濃

木家を家のかくを嶽見ても藪り水　藍庭

起されし紫蘇にも声なり郭公　露牛

信濃

匂ひも香を探らふ來し梅の木　肖我

秋の行衛なつかしや峰を見る雲　雉山

なつかしや遊ひ處えて茅の紀　其残

咲乃花や立派那出よ錦かな　月盛

坂をゆやもて行ぐ女の煙るかな　樂二

峰の宿は渡も見ゆる日や春の風　凌冬

深過て久しく音も颯紅葉哉　琛坐

勢てから咲も咲る濃し杜若　松渓

猿曳や出船見送る手を振　ちさ丸

上野

梅ふ月汐ハ垣根ふそよきけり　為流

山吹て物皆ふるて山のしも　素古

見とりふちひろう神音そ時鳥　乙瓢

茶の花ふ並居てえてきも花もなし　其静

下野

鈴ふりて鳴かぬ出来る露の秋　岩精

梅が香に和らぎ絶て萩の道　如川

高き事のおきもよし夜相識　此山

岩代

東の月や峯の日影をこしかる　素五

卯の花や垣根の影をつくしき　袋瓢

本堂はさびしからんし春の月　思山

行水のうへに花来る流れかな　自楢

蓄う流は御を嗅ぶ吹飯ぶ　冬甫

晴しとに人引出て来る露かれ　鴻童

御るりかま小まどる宗ごし　菓露

揺られつ近うてやり分る牡丹　眠雀

ゆづうとして一月の夜の郷　壮山

陸前

以越えてもさはむ年の坂　北山

青柳となりしきはりや秋の傘　杉苛

手をおいて月秋にちらう夷講　花守

咲ちりて大空低き桜の郷　五三

人込を出てさかりや末の原　畊月

梅添て又もく深秋の空哉　河玉

酒屋の名を茶室の好き哉　孤邪

ゆくのまゝれ提て通るや蓮の花　東山

陸中

ちる月を蓋て水汲む男かな　芳洲

牛ゆかる新か光るや春がくれ　盛帆

十分秋去や稲もさへ渡りて　汐山

陸奥

御忌ちる稲に啼りて人の縁かな　有川

ふるらしき蔦かり東にかゝる箕　涂風

羽後

穀の斗や稲雲ふりをまうて降　素山

市中を見ほと静かに樓取　二案

沸る湯の釜に日行しや松の雨　也壮

越前

佐屋にやとりて水郷碑を読て

水郷より先に咲らん蓬の川　雪主

加賀

飽晴れなかてら世の春を雪花の神　雪袋

買かはひや桜より込む門の桂　文畾

常太の諸羽洗ふまきは水　木圭

能登

牛ひとつ繋てもと涼や枯野原　守朴

美しき思のちらや雪乃花　蓀

越中

枝ぶりに花おしいなりぬなつめ摘　其譲

越後

漁舟霞に入るや帰る雁　雪潮

梅ふのみさまでと思ふ野路の桃　晴雲

さの村より精進ふよき芭柚かれ　青暁

古ひたる手うひや昔の花　亀石

扇おく暇や富士ふも雲か汐　抱月

梅ふ月歌とあるしの風情かな　くら女

こしう秋や竹さと吹ふ明しらむ　徐風

さうくわや以つる柳の名も春　允儀

若水やこむらわ月と雲明の里　鶯春

隣返る柳の静さよ鳩の扇　旭扇

爪先の御ふそふそしく秋の句　聚九

河ら雷見て能起せぬや杜若　木甫

佐渡

一葉ふけ庭をまはりて芋売声　斧柵

挿さしの苗木蔵つて時雨けり　遠荃

さ月中清子なきて山の郭　収之

透されハ薮も小家し后の月　後志　劉几

垂もし穂やわ寿なりふ如伎　應井

秋らかれて染まひや衣破り　墨雨

手すりつ引て鮎をちる一葉哉　因播　馬呀

とし咲て菊やせめ寂の秋　伯耆　菊堂

今朝まて行く風のもゆかし福寿草　出雲　鶴楼

笠の香に淡雪さる宿の秋　石見　曲川

ちりかゝる世を結ひてや鏡もち　備後　静雄

新しき家の古竹の若葉の秋　暁雨

水音ゆ一流れなりや山おろし　翠影

周防
前ころ河と白波や雲の峰　素兄

長門
螢とんで杉見ゝと思ふ竹節に　梅宿

淡路
さゝりそと押よせ日暮に人もゆく　甫条

阿波
春雨や扇て茅那る船ゆかう　吹香

草むらや露も嬉しきものゝ秋　史白

吹風の行方をきりやこゝら楓　竟年

結ふて稲をおしけり小柴垣　抱清

春の水田ごしの泥京清む双之　秀竹

讃岐
春鼓を押よせ障子の朝日影　宇茬

惜しのらぬ荒気よ花ちる都櫻　其海

手に香せて裏てある乃初袷　一巴

松の明て千鳥来るや瀬川　伊与 鶯居

来ぬ雨に鳴るかなき一声　半窓

土佐

月の秋と妙人も手折しや花　松塘

さいとわ白梅ふいよこと葉られ　五菖

豊後

花のさく菜花ら鏡せ登抄深　巖北

新しき茶に酌らし秋の新　乙人

日向

木の芽に冥にもよらぬ花て手返　流庵

遊客

柴の戸の美しうする若葉かれ　連梅

中空きけふにも暮けり一重山　立意

まつりよい天気の行ゑ定め神　流芳

おもしろし雪降城の猿こそは　玄然

秋風や中庭ハ高き山の衣　有香

無造作にうちち延て行竹筒と　託生

古来の秋にあり秋流し元　莵好

黄昏や青に柳の浅みこの節次　折香

東風吹やこゝろの小雪野げしき　茂翠

漁翁に暮らしやる夢村落葉　村雨

水音も何ともなく恋し冬籠　十水

残る鶴まさへ折秋の暮　以足

明治十六季癸未秋十月

鈴木氏藏版